

片隅の一市民から憂國の士へ

——『浮城』がもたらした梁曉聲の變貌——

杉 本 達 夫

一

梁曉聲（一九四九—）は一九九二年に長編小説『浮城』を發表した（二〇月、花城出版社刊）。人口二百萬の海邊の大都市が、あらしの夜に大陸から離れて海上を漂流するという、梁曉聲の小説としては奇想天外な舞台設定の作品である。この小説を發表したころから、梁曉聲が次第に變貌してきたという印象を筆者は得ている。印象であって、はなはだ抽象的な表現になるが、作者の立つ位置が片隅の一市民の座から憂國の士の座に移った、あるいは作者の視線が地表から天の高みに移った、と言ってよからうか。

梁曉聲の『浮城』に到るまでの數多い作品を概観すると

き、そこにふたつの系列を見出すことができる。さしあたりそれをA系列、B系列と呼ぶこととしよう。ただし筆者は數多い作品のすべてに目を通したわけではなく、かれの著作目録を前にしたとき、まだ見ぬ作が多いことにはなはだ戸惑いを覺えていることを、告白しておかねばならない。したがってふたつの系列というのも、筆者が讀んだ限りでの抽出である。

A系列に屬するのは、ハルビン市の貧しい建築労働者の家庭に育った作者自身の分身「わたし」を中心に据えて、「わたし」の成長の各段階で深い關わりをもった人物や事件を描いた作品群で、數は少ないが佳作ぞろいと言ってよい。「父親」（八四年）、「母親」（八六年）、「潰瘍」（八五年）、「黑紐扣」

(八五年)、「普通人」(九〇年)がそれであり、これに「老師」(九一年)、「白髮卡」(九一年)が加わる。その多くは「梁曉聲親情小説選」(西北大學出版社、一九九三年)に收められている。主人公はそれぞれに異なるが、それら人物を語るのは「わたし」であり、「わたし」は梁曉聲という實名で登場し、今は北京に住む作家である。すなわち作者その人である。もちろん作者自身を含めて、人物や環境には小説的虚構が施されている——たとえば「父親」「母親」「潰瘍」に登場する精神を病む兄が、「黒紐扣」には存在しない。「黒紐扣」と「母親」とでは母の職場が違う。「黒紐扣」の主人公たる「おばさん」は、この作品にだけ唐突に登場する、等——のではあるが、作者自身の成育環境、成長の過程という事實そのものが作品を支えている。すなわち、自傳的要因が色濃く投影されている。ここに作家梁曉聲の精神的故郷がある。

B系列に属するのは、文革期に北大荒に下放した知識青年をえがく作品群で、量的には最も多く、出来ばえに當たりはずれ目立つ。代表的な作品では「這是一片神奇的土地」(八二年)、「爲了收穫」(八四年)、「今夜有暴風雪」(八二年)、「白樺樹皮燈罩」(八三年)に加えて、長編『雪城』(八八年)を擧げることができる。各編それぞれが單獨の虚構であつ

て、A系列に見られるような、全體を進行させる「わたし」は顔を出さない。「わたし」なる人物はしばしば登場するが、それは物語に設定された一人物たる「わたし」であるにすぎない。とはいえ作者梁曉聲は北大荒の建設兵團の一員であったのであり、作中の人物たちと運命を共にしていたのであつて、その強烈な體驗がこの系列の作品を生み出している。さらに言えば、作家梁曉聲を成り立たせている。

すなわち、『浮城』に先立つ作品の多くが、梁曉聲の原體驗と不可分の關係にある。『浮城』は前述のごとく、空想の場面に成り立つ長編であつて、A Bいずれの系列にも屬さない。『浮城』は九一年一月に脱稿しており、前記の「老師」「白髮卡」、またさらには「表弟」(九二年)は、あるいはこれと同じ時期に、平行的に書かれたかと思われ、「冉之父」(九二年)、「恐懼」(九三年)、「棄偶」(九二年)などは『浮城』脱稿から間もない時期の執筆と考えられる。

『浮城』以後の作品、さきに筆者が作者梁曉聲の變貌を感じると述べた作品には、「達麗之死」(九四年)、「激殺」(九四年)、「荒棄的家園」(九五年)、「學者之死」(九六年)、「司馬敦」(九六年)、長編『泯滅』(九四年)が含まれる。このうち『泯滅』は前述のA系列とB系列の延長線を交差させたような背

景と人物をもっているが、物語が訴える事柄は大きく隔たっている。

『浮城』のなかに梁曉聲の轉換をもたらすような要因があるのかどうか、あるとすればそれは何であるか。以下、前後の作品を鳥瞰しつつ、『浮城』の意味を追うこととする。

二

『浮城』以前の作品は何を訴えかけていたか。

A系列の作品についていうなら、全體を貫くものは「汚れなき魂」であり、「人間としての尊嚴」であるだろう。

「わたし」はハルビン市の一角の、忘れられたはき溜めのような場所の、なかば土に埋もれた廢屋のごとき借家に、兄弟姉妹とともに育つ。父は建築現場の下級労働者。数知れぬ住宅の建設に従事しながら、ついに自分の住宅の配分にはあずかれなかった人物である。「父親」における父は文化教養を白眼視し、腕だけが男の値打ちだと信じていて、それが兄の精神病院入りの一因となる。一文でも多くの収入を得るために、遠い西北に單身赴任し、爪に火をともし暮らしを續けるが、曲がったことはけっしてしない。得をしようとかずるをしようとかは露ほども考えない。その父もこどものために

は生きる原則を踏み外しそうになる。知識分子となって北京で暮らす「わたし」は父とたがいに分かり合えないが、一時北京に假寓する父は、定住している「わたし」以上の存在感をもって、たちまち隣人の間に位置を占める。その父に注ぐ「わたし」の目は、反發を交えながらもより大きな尊敬へと變わり、むしろ負い目を感じている。

「母親」における母は、父の留守を守ってこどもを育て、家計を助けるべく遅くまで外で働く。貧苦にはいくらでも耐えるが、不當な壓力には屈しない。人を助けはしても苦しめることは斷じてない。貧しくとも胸を張って生きること、人としての正しい道を踏むことを、身をもってこどもたちに教えるのである。「黑紐扣」におけるおばさんは十代でハルビンに出てきて、「わたし」の家に同居し、母と同じ職場で働くのであるが、廢屋同然の家を整備し、ごみ溜めを花壇に變え、「わたし」たちを教え導き、こどもたちに生きることのすばらしさを教えてくれる。おばさんは未婚の母となるが、けっして相手の名を明かさない。模範黨員であり殉死した英雄である愛する男の名譽を、生涯かけて守り通すのである。名もなく地位もなく財もなく、あるのは貧困と屈辱だけのような境遇にあって、人を羨まず、恨まず、運命を呪わず、

與えられた條件のなかでけんめいに生き、人倫を貫く。最底邊に生きる身であるからこそ、おのれの存在の誇りをかけて、清らかな人生を歩むのである。この人々の勇氣と正義、清々しく潔い姿勢は「わたし」にも受け繼がれてゆく。「わたし」が語る人物たちと、人物たちの影響下に成長する「わたし」、その兩者の織りなす人間模様が、読む者の胸に爽やかな感動を呼び起こすのである。

B系列の作品はすべて北大荒に關わる知識青年が主人公である。黑龍江省には四〇萬人の青年——少年少女といつてよい年齢の男女が移住し、建設兵團に編入された。直前まで都市を席巻した紅衛兵集團が、國策に呼應し、革命の要請にしたがつて、自らの革命的行動として、未開の原野に身を投じたのである。十年たつて、すでに青春の輝きを失つたかれらは、いつせいに都市に戻るのであるが、しかし戻る日を迎えることなく原野に葬られた青年は數知れない。戻つた青年たちを待つのは、待業という現實であり、身の置きどころのない住宅事情である。十年という歲月は短いものではない。そのあとの歲月もまた短いものではない。北大荒のきびしい自然條件ときびしい規律のなかで、さらにはきびしい社會的條件のなかで、作中の人物たちはけんめいに生きてゐる。希望

も絶望も、友情も裏切りも、眞實も虚偽も、反抗も服従も、戀愛も別離も、すべて含めてひたすらに生きてゐる。

「這是一片神奇的土地」のなかの、自らにきびしい戒律を課す美貌の政治指導員は、風土病にかかつて死ぬ。その指導員に戀する男「ムーア人」は、狼と戰つて死ぬ。「ぼく」の妹は底無し沼に吞まれて死ぬ。「ぼく」ひとりが生き残つて、やはり戀するその指導員の屍を運ぶ。「爲了收穫」のなかの青年たちは、多數の仲間の犠牲のうゑに開拓しえた農地に、みごとに麥を實らせる。そしていざ收穫という時、鎌入れ式のために訪れる指導者の都合で、順調な收穫を妨げられることになる。「今夜有暴風雪」では都市への歸還をめぐつて、指導部と青年たちとの間にさまざまな紛糾があり、そして町へ歸れるはずの日に、山で歩哨に立つたまま忘れられた一女性が凍死する。愛も希望も凍土に埋める死だつた。「白樺樹皮燈罩」における白樺の樹皮でつくつたランプシェードは、男が短い生涯の終わりに作り、愛する人に残した唯一の品であるが、都市に運べば無骨な細工物でしかない。肝心の人の手には渡らず、無縁な人の手に渡つて、思わぬ人生模様をつむぎだす。

長編『雪城』はハルビン市に戻つた青年群像を描く。歸郷

者の群でごったがえす驛構内で、一青年が捨て子を拾うところから物語は始まる。市には一舉に増えた十萬二十萬を受け入れる職場はない。都市自體が文革で疲弊しきつていて、青年たちは慰勞されるところか、新たな社會不安のもととなる。だが青年たちにはそれぞれ生活があり事情がある。さまざまな場における人生設計の苦闘が、挫折と成就が、そして都市の變貌と改革の緩やかな歩みが、一大繪卷をくりひろげる。結末が甘いのが不満であるが、ひとつの世代が十年間も下放していた事實、かれらの生きる戦いの迫力は充分に傳わってくる。

青年たちは下放を通して、自分たちの生きる大地を知る。革命の裏がわ、權力の裏がわ、人間の心のひだを知る。そうした成長の過程とともに歩んできた梁曉聲は、作中の人物と呼吸をともにしている。作者の息づかいが、行間に聞こえてくる。梁曉聲が綴るのは、ひとつの世代の希有な歲月への記念碑であり、土と化した仲間への鎮魂歌であり、時代への證言である。

以上の二系列について言えば、作者の位置は人物とともにある。視線は地表に生きる庶民の目の高さにある。

系列外の作品については、かならずしも同じことはいえな

い。たとえば「人間煙火」(八四年)など、權力が自らを淨化し、貧窮市民を救済するという、夢想的講談を語っている。願望の逆説的表現であろうが、風刺も揶揄もなく、「父親」と同じ年の發表とは想像しがたい。が、そうした作品への言及は控えておく。

三

では『浮城』はどういう作品か。

陸の一部が大陸を離れて、二百萬都市が海上を浮遊するという、一見SF仕立ての事件から物語は始まり、SF的場面も挿入されてはいるが、ここには現實を越えた「科學」も「超先端技術」も語られず、また科學的幻想を意圖したわけでもなく、SF小説とは言えない。ここには今日の中國が抱えるさまざまな問題、さまざまな苦悩がごった煮のごとくに投入され、それらがあるいは風刺、あるいは誇張されて、ときに戯畫化されてゆく。基調に流れるのは中國の現状救済と新生への願いであるだろう。

自分の生きている足下の地が、一夜にして孤島と化し、かつ海上を浮遊するのである。住民にとっては豫想だにせぬ大災害であり、明日を知りえぬ極限状態に投げ込まれたのであ

って、當然パニックが起きる。暴徒が破壊に走り、群衆が盲動する。市長に對して、いくつもの派が策動し、やがて市長は暗殺される。行政が麻痺し、デマが飛び交い盲動がうねるなかで、大學生、一般市民、個人營業者、ならず者等、立場を異にする者の行動の差が際立ってくる。地上の混亂に加えて、猛禽と化したカモメが海から人間を襲いはじめ、人間對カモメの凄慘な戦いが展開される（映画『鳥』ないしそのモデルとなった事件を借りたものと思われる）。

危機がひとまず去り、今後を考えるゆとりが生まれたとき、人々の目指す方向はふたつに分かれる。ひとつは出國の道で、海洋を漂って日本に上陸しようとする。ひとつは歸國の道で、社會主義中國の懷に歸ろうと考える。島を操縦できるわけではないが、目標を定めるのである。日本を目指すのはひと稼ぎするためであり、中國を目指すのは愛國心と民族の誇りのゆえである。五星紅旗派と日の丸派の對立を乗せて、島は次第に日本に近づくが、日本は早くも海岸を巨大な氷壁で封鎖して、上陸のすべがなく、島には龜裂がはしり、端が崩れ、廢墟のごとき町のなかで、人々は水と食料を奪いあう。島はさらに太平洋をアメリカに向かうが、アメリカもまた拒否の構えでいる。やがて中國海軍の艦艇がきて、

片隅の一市民から憂國の士へ（杉本）

戻る者は救助され、出國派は石を投げ發砲して救援を拒否したあげくに、島とともに海に沈む。

孤島は大きな密室であり、無法地帯である。秩序と希望が失せたとき、各人がどういう行動をとるか。理性と本能がどのように働き、欲望がどのようにはじけるのか。作者が描くのはすべて中國の傳統を受け継ぎ、中國文化のなかで育った中國人の行動であって、作者の中國人觀、中國社會觀の表明にはかならない。孤島は中國の縮圖にはかならない。そして作者は祖國と同胞にたいして、自分が屬する中國の現實にたいして、きびしい叱責を加えていることになる。あるいは中國自體を「浮城」とみなし、「浮城」の漂流をととめるべく叫んでいる。

中國文化の優越を説き、民族の誇りを説いた愛國派は、出國派をついに説得できなかった。凄まじいまでの出國願望の強さは、稼ぎだけが動機ではない。多くの場合、中國を離れること、外の世界に出ること自體が、じつは大きな動機である。日本が近づけば日の丸を振り、飛行機が近づけば星條旗を掲げた出國派は、しかし希望を實現できなかった。かれらを待つのは足場の崩壊であり、死であり、生きて歸るのは愛國派である。脱出の希望は消滅するほかない。とはいえ救助

されて歸國する人々も、歸國を喜んでゐるとは限らない。かれらは生き延びるが、待ち受けているのは舊來の日常であり、現實である。作中には文化大革命期を思わせる場面がまある。文革の災禍をくぐりぬけた中國と、漂流の危機をくぐりぬけた市民とは、同心圓で重なるのかどうか。

この作品を書いている作者の視點は、全中國を鳥瞰する位置にある。もはや地表に生きる個人の視線で周圍を見ているのではない。なお、隔絶された世界を設定し、そこに中國を投影して、中國の國民性、中國社會の性格を浮き立たせるという方法は、中國でいえば老舍の長編『猫城記』を想起させる。

四

さきに筆者は『浮城』以後の、作者梁曉聲の變貌を感じる作品として、『達麗之死』（九四年）、「激殺」（九四年）、「荒棄的家園」（九五年）、「學者之死」（九六年）、「司馬敦」（九六年）、長編『泯滅』（九四年）を挙げたが、これらの作品には何が書かれているか。「達麗之死」はタレントを目指し追っかけ族となった少女の死を、「激殺」は日中合辦企業に勤める課長が日本人社長を殺すに到る過程を、「荒棄的家園」は過疎村

に残った少女が、寝たきりの母を殺して都會に出る事件を、「學者之死」は巨額の借金を抱えた果てに、こどもを残して死ぬ學者を、「司馬敦」は誘拐殺人の罪で死刑となる少女と、事件を解決する警察官を、描いている。いずれの作品も死がからんでいる。あるいは殺人が、あるいは自殺が。原因はすべてかねにあり、社會の激變と精神の荒廢にある。

たとえば「學者之死」では、優秀な學者が學術書を刊行した結果、高い評價は受けるものの三萬五千元の借金ができ、職場の住宅を個人が購入することになってさらに三萬五千元の借金ができ、息子の高校入學金に八萬元を要求され、詐欺じみたことをしても追いつかず、あげくに車に轢かれて死ぬ。「荒棄的家園」では老人だけとなった過疎村に、寝たきりの母にしばられてひとり残る少女は、心がすさみきつてゐる。都會で賣春をして稼ぐ友人たちの華やかな話にひかれた少女は、母を締め殺し、家に火をつけて都會にでる。たちまち逮捕されるが、警官にむかつて友人から教えられた悩殺ポーズをけんめいに繰り返す。「司馬敦」では身代金を目當てに嬰兒を誘拐した少女は、嬰兒を死なせ、他人をも殺してしまふ。誘拐されて嫁不足の村に賣られた友を助けるために、身代金稼ぎを考えたのだった。刑事が命を張って誘拐團を捕

らえ、友を助け出すが、友はすでに身籠もっており、そのまま残るといふ……。友は少女とともに町へ稼ぎに出て誘拐されたのである。

拜金主義、盲流、棄農、賣春、誘拐、教育費（入學制度と學校財政と納入金の不合理）、外國資本と文化摩擦……ここに描かれているのは、いずれも今日ただいまの中國の深刻な社會問題である。梁曉聲個人に關わる世界ではなく、天下國家の悩みである。そうした一連の「公」の問題を、梁曉聲は連續して取り上げている。小説に書くからには、作家として興味を引かれるからに違いない。しかしながら小説的興味よりも、深刻過ぎる荒廢現象に警鐘を鳴らさなくては、という姿勢のほうを、筆者はより強く感じるのである。

『泯滅』（九四年）は前述のごとく、A系列とB系列の延長線が交差したような人物配置になっている。中心人物の「わたし」は梁曉聲という名の作家であり、翟子卿は梁曉聲のこどもの頃からの親友で、學習においても讀書においても、人格においても體格においても、「わたし」の兄貴格だった。ふたりはハルピンの貧しい労働者のことも同士。運命共同體のようにして育つ。北大荒で翟子卿は孤高の姿勢を保ち、ある事件をきっかけに、さらに邊境にとばされてみんなの前か

片隅の一市民から憂國の士へ（杉本）

ら姿を消す。二十餘年ぶりに會つた翟子卿は、ハルピンのブローカー社會の親分格で、大きく稼いで大きく使い、市のちよつとした顔になっていた。老いた母と美しく聰明な妻を豪邸に放置したまま、家には歸らず、愛人をとるかえつつ外で暮らしている。稼ぐのは物欲からではない。すべてを支配しうる經濟についての確固たる哲學があるからであり、「わたし」に對しても小説をやめて經濟活動に轉じよと説く。

翟の哲學の開陳、「わたし」の反論、「わたし」の卑小さへのきびしい自省（その繞舌な自省のことは自虐的でさえある）、翟の妻の述懐等、議論と獨白、心を語ることばが、長い小説の相當部分を占める。翟は市場經濟の英雄である。その哲學は拜金主義を根底から支える理論的根據であり、現實によつて裏づけられている。「わたし」は拜金主義の激流に逆らい、人文の砦を守ろうとしている。「わたし」の反論は翟の哲學に對して効力をもたない。だが翟は飼犬が母と妻を噛み殺したことが發端となつて發狂し、精神病院に收容される。文學に踏み止まる者の道理が勝つたのではない。翟は自壞作用で滅びたのである。建國初期の少年同士、文革期の知識青年同士、歲月を経ていま現れたあまりに大きい懸隔は、變革がもたらした變貌の負の集積である。翟の後には第二第

三の翟が續き、拜金主義の激流は勢を増し續けるであらう。翟の誘いは「下海」への誘惑である。「わたし」のことは作者自身のことばであり、「下海」の流れに抗する心中の表明である。作者は拜金主義に抗するおのれの無力を知りつつ、翟を破滅させることで、おのれの姿勢をより明らかにした。時世への警鐘である。

五

文革以後の文學に目まぐるしく現れた「××主義」「××派」と、梁曉聲は無縁に過ぎしてきた。強いて主義に分類するなら、やはり「批判的現實主義」であり、「生活に關わる」一員であるだろう。A系列であれB系列であれ、『浮城』であれ『浮城』以後であれ、その點は一貫している（B系列の「這是一片神奇的土地」「爲了收穫」などはロマンチズムと言えようが）。そしていま、梁曉聲を張承志、張煒と並べ、「眞に勤勞人民の立場に立つて」聲をあげる作家だとする評價が現れている。張承志、張煒は「道德理想主義」の旗手と目され、「二張」と併稱されていて、市場經濟の時代の負の現象、近代がもたらす荒廢、欲望に吞まれてゆく人のありように、異議申し立てをしている。梁曉聲の『浮城』および『浮城』

以後の作品は、その點ではまさしく同一線上にあろう。荒廢現象に對して警鐘を鳴らすとは、倫理道德の回復を訴え、自己回復を訴え、秩序ある安定を求めることであって、政治批判には向かわない。むしろ體制には心強い聲であらう。純粹に個人に發する倫理的主張を、體制云々に結びつけるのは、作者にとっては心外であらうが、たとえばさきの六中全會が發した精神文明建設の提倡など、目指す方向が一致するのではあるまいか。それはたしかに今日の國家的な緊急課題なのである。

しかしながら、社會を鳥瞰する視點から警鐘を鳴らす作品というのは、對象と作者との關係が希薄である。作り物めいてくる。憂國の情がそのまま作品の價值に變わるものではない。たとえば「荒廢的家園」について、高く評價する見解がある⁽³⁾。ところで、ここに書かれたのは現實の農村の姿ではなく、作者は生活から遊離して粗惡品を作り出したと批判する聲があるのは、(こういう質の批判は嫌であるが)やはり作りものの弱さが衝かれたことであらう。とはいえそうした作品にあつても、いわゆることばの浮遊はない。梁曉聲に於ては、ことばへの信頼は揺らいでいないのである。

人は年をとる。作家もまた年齢を加えるにつれて成長し、

成熟してゆく。關心の對象が變わり、社會的使命の自覺のありよう、情熱のありようが變つたとて、それは當然のことである。ただ梁曉聲に關する限り、ひたむきな息づかいが聞こえたA B系列のころを、筆者は懷かしむ。

注

(1) 『中國小說名家新作叢書 梁曉聲卷』卷末付録。海峽文藝出版社、一九九四年一月刊。

(2) 熊元義『「搬家」神話的終結』、『作品與爭鳴』九六年第三期、一二二ページ。

(3) 同右。

(4) 安怡『被荒棄的生活』、『作品與爭鳴』九六年第八期、七三ページ。

本文中に言及した作品の發表の場所と時期は以下のとおりである。九三年以前の作品については、主として注(1)付載の作品目録により、一部筆者による補充修正を含む。

- 「父親」(短編) 『人民文學』八四年一期。
- 「母親」(短編) 『文匯月刊』八八年七期。
- 「潰瘍」(短編) 『文匯月刊』八五年八期。
- 「黑紐扣」(短編) 『中國作家』八五年五期。
- 「普通人」(短編) 『田野文學』九〇年一期。

片隅の一市民から憂國の士へ(杉本)

- 「老師」(中編) 『時代文學』九一年六期。
- 「白髮卡」(中編) 『上海文學』九一年七期。
- 「這是一片神奇的土地」(短編) 『北方文學』八二年八期。
- 「爲了收穫」(短編) 『青年文學』八四年一〇期。
- 「今夜有暴風雪」(中編) 『青春叢刊』八二年一期。
- 「白樺樹皮燈罩」(短編) 『海燕』八三年一〇期。
- 「雪城」上下(長編) 北京十月出版社、八八年一〇月刊。
- 「表弟」(中編) 『鐘山』九二年一期。
- 「冉之父」(中編) 『時代文學』九二年四期。
- 「恐懼」(中編) 『海峽』九三年三期。
- 「棄偶」(中編) 『上海文學』九二年七期。
- 「達麗之死」(短編) 『女子文學』九四年九期。
- 「激殺」(中編) 『人民文學』九四年九期。
- 「荒棄的家園」(短編) 『人民文學』九五年一〇期。
- 「學者之死」(中編) 『十月』九六年一期。
- 「司馬敦」(中編) 『人民文學』九六年七期。
- 「泯滅」(長編) 春風文藝出版社、九四年七月刊。
- 「人間煙火」(中編) 『飛天』八四年一期。